通信第七十九号　の救い

　　のは

　　無明の闇をてらしつつ

　　一念歓喜する人を

　　必ず滅度にいたらしむ

　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　曇鸞和讃

この頃、朝夕の勤行中に浄土から響いてくるご和讃に出遇わされます。滅度という世界は私においては遠くの世界でした。藤谷秀道先生から「親鸞さまの『教行信証』の証の巻はこれからだ」とお聞かせいただいてから四十五年の歳月がたちます。

　大石先生からは信後の生活のあり様として、証の巻さらに『浄土論註』のお教えをかみいてお育てをいただきました。親鸞さまは証巻の初めに必至滅度の願（十一願）・難思議往生（十八願）をかかげられています。日常生活では聞くことのない難しい言葉が続いて申し訳ありません。しかし、私においては根本的に大事なことなので少ししてください。

　私は仏教の書物を読んで理解していったのですが、だんだんと暗くなっていきました。仕事も行き詰まり、家庭生活もギクシャクしていきました。勉強した仏教の教えは生活の中で生きてなかったのです。ですから、なお落ち込みました。思いの仏教に絶望し、思いの自分に絶望していったのです。言葉だけがぐるぐる回って牢獄に居るようでした。

　そういう中であったから、大石先生に出遇えたのでしょう。先生のどこにかれたのか。そのことが現れているご文章に最近遇いました。

　　念仏は仏の御智慧と申しておられます。てしない智慧ですから、光明無量とか尽十方無碍

　　光とか表現してくださいます。言葉で現わしたらもう絶対ではなくなります。だが言葉に出さねば救済のてがかりがありません。そこで「いろもない、形もない、心も及ばず、言葉も絶えた法性法身」から口に称え易い御名号となって現れて下さったのですから、お念仏が出て下さった時には、形無き世界に往生させて頂いているのです。だから言葉が消えるのです。言葉や理論で証明する必要がないのです。証明しようとしたり、認めさせようとする我が消えるのです。又証明し認めさせる相手も消えます。だから信ずるとか、信じられぬとか、疑いが消えます。、ほれぼれと、仏様の広大なる光明の天地と一つにとけ合っていることを、仏願のおかげ、師教のおかげと、感謝させて頂けるのです。その感恩の心も仏様からたまわったものですから、「南無阿弥陀仏」とみ名を称えて報謝さされるのです。

　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　書信６❘３

形の無い世界、言葉や知識や感性では及ばない世界です。ところが深い悲しみや苦悩がご縁となって苦しみや悲しみが超えて行けるという事実があります。私がその通りでした。

お釈迦様はおさとりになられてしばらくご説法をなされませんでした。娑婆世界の主たるが尊いおさとりの境地を説いて下さいと釈尊にい願いました。しかし、お釈迦様はなかなか説かれませんでした。なぜなのか。いろもない、形もない、言葉も絶えた世界です。世間の価値で生きているのが大多数の人です。出世間の法を説いても、ほとんどの人が無関心か、さっぱりわからないか、反発するしかないことがわかっていたからでありましょう。それでも、梵天は「あなたのお教えに遇ってひとしれず深い悲しみ、苦悩にあえぐ人が救われます。どうか、説いて下さい」と。何度もされたのです。

には「私が説いたならばかえって人びとに害をするのではないかと思ったからである」と書かれています。もし説かなかったら今日の仏教はありませんし、今ここの私達はありません。

ふと思わされます。「さっぱりわからない、反逆する、無視してわすれてしまう」は誰のことか。実は私自身であったのです。今もそうなのです。その中で一刻も休みたまわず私の内外で法蔵菩薩様（如来様）がはたらき続けて来たのでした。今、書かされているこの瞬間もです。たとえば心臓が寝ていようが、腹立てていようが、なまけていようが働き続けておられるように。もし休んだら生きていけなかったのです。

藤解照海先生が「念仏を離れたら生きていけない自分に遇いなさい」とおおせられたのはこのことでした。私は肉体の藤解先生にはお遇いしたことはありませんが、大石先生の中に、ＣＤテープや日めくりカレンダーで毎日のようにお育てを頂いています。藤解先生の背後に親鸞さまがいつも生きておられます。親鸞様のお心が、ご本願が生きて伝わってきます。単なるお勉強や学問、知識ではないのです。生きて響いてきます。生活がそうなっておられるからでありましょう。私において念仏の道を本気で歩ませて頂こうと決心させて下さったのは先生方のお陰であります。

大石先生が私の真宗聖典の証の巻を開かれ、次のご文を人差し指でなぞられました。

　それ真宗の教行信証を案ずれば、如来大悲廻向の利益なり。かるがゆえに、もしは因もしは

　果、一事として阿弥陀如来の清浄願心の廻向成就したまえるところにあらざることあること

なし。因浄なるがゆえに、果また浄なり。知るべしとなり。

　二つに還相の廻向と言うは、すなわちの益なり。～～『浄土論註』にれたり

～『浄土論註』をひらくべし。

この事は、私の人生を方向づけられるほどの象徴的出来事でした。

滅度、浄土、涅槃とは人間心の一点の交わらない清浄、真実の世界であります。身心ともに濁りきった、悪業煩悩の人間とは真反対の世界です。だから絶対に救われるはずのない人間が救いにあずかれるのです。ただただ、南無阿弥陀仏、南無阿弥陀仏と仏恩報謝のお礼のほかありません。

　親鸞様は十八願のお心を三心にわけて教えてくださっています。なぜなのか、くどいほど人間は無始以来清浄の心が無く、真実の心がなく、沈み救いようのない煩悩具足の凡夫であると念を押されています。「だからこそ、お前自身に遇ってくれ、本願真実に救われる、本願を信じ、たのめ」と確信をもって教えてくださっています。

アメリカ、ニューヨークを発つ前日はゲーリーさん宅でのご法座でした。ゲーリーさんご夫妻はドイツ系アメリカ人です。毎日の勤行は日本語読みの『正信偈』とご和讃です。来年の三月に教師の資格を受けられるため日本に来られるそうです。第一番のご法話を長仁寺でされることになりました。

ご法座はお文様一四のご縁でした。

問うていわく、「と滅度とは、とこころうべきか、またとこころうべきや。」

答えていわく、「一念発起のかたは正定聚なり。これは（娑婆・世間）の益なり。つぎに、滅度は浄土にてうべき益にてあるなりとこころうべきなり。されば、二益なりとおもうべきものなり。」

浄土にてうべき益を、肉体が死んだ後と解釈したら真宗の救いは台無しです。お釈迦様の無我の教え、涅槃の境涯は絵にかいた餅のようになり、生活とおおよそかけ離れたものになってしまいます。十八願の念仏往生、他力の信心を頂くということは、浄土を頂く事、浄土に生れる事です。二十年ほど前でしょうか、熱心な坊守さんが長仁寺へ来て本当に求めて聞いている人がいると驚かれました。その反応に私が驚きました。その坊守さんにとっては、本当の救いは死んだ後で、この世ではそういうことを聞いておくぐらいな位置づけなのだろうかと不思議に思いました。

　人のことではない私自身がそこの大事なところをにしてきたことを知らされました。アメリカでの忘れられないお土産と成りました。

　さて九月十三、十四日は富山県高南砺市の浄円寺（重共聡住職）の本願道場にて嬉しい出遇いがありました。信心の香りが残っている土地がらの中、八十五才の藤井貢さんが五箇山から車で一時間以上かけて二日間ご参詣下さいました。藤井さんはあの有名な同行である赤尾の道宗さんの血が流れているとお聞きしました。道理で何かたのもしい念仏者の風格を感じたはずでした。

藤井さんは二十代のころ藤解先生を訪ねて広島へ四，五回行かれたとのこと、人生に迷い、苦しくて何度か直接に電話をされたそうです。藤解先生からの答えはいつも「ただ心静かに念仏申しなさい」だったとのこと、不思議に私にも深く伝わってきました。藤井さんにとって六十年間その願いが生き続けています。その日、新潟県から来られていた、林康一朗住職さんが「私はその一言が最大のお土産に成りました」と言って喜んで帰られました。懇親会も世間話はなく、楽しい仏法談義でした。蓮如上人が長い旅路を来られた同行さんに冬は酒を燗にし、夏は冷やしてねぎらわれたのはこういうことなのかと思わされました。にぎやかな懇談の中で私は中島恵子さんという坊守さんに「ほんとうを求めて、ほんとうに成って下さい」と申し上げました。そんなことを言う私でないから、如来さまに言わされたのでしょう。言った私が驚きました。中島さんは一度長仁寺へ行きたいと妙敬寺の坊守さんに言われたそうです。

　また、その場の雰囲気を見ていた「みんなの金曜日」という店のおかみさんは「次の時は私もその中にいれて下さい」という要望があったことを重共さんが伝えてくれました。おかみさんは障害者のお子さんがおられ、グループでお弁当を作る店もしておられるそうです。

　二十日、三重県松林寺（森愚英住職）の本願道場では愛知県から杉山さんが初めてつれてこられたさんという女性が終始泣いておられました。なぜ泣かれるのか聞かれませんでしたが、その後、杉山さんから布施さんも含めて五人で新潟の等覚寺・圓性寺報恩講にご参詣する連絡を頂きました。最近、何か少しずつご本願の火が燃え広がって来つつあるのを感じさせられます。

　最後に二人の同行さんを紹介します。

　前略、渡米前のお忙しい折にかかわらず、ありがたい大石先生の冊子「念仏の親子」「生きていてよかった」「リモート法座（一）」通信第七十六号長仁寺報第三十三号をお送りくださり、何度も読み返しております。お礼が遅くなり恐縮しております。

　今後とも聞法を続けさせていただけるご縁をまことにありがたく、深く感謝しております。

　わからないまま、どうあっても聞法を願うわたくしのこころには、法蔵菩薩さまのおはたらきが届いている不思議を味わっております。

　「後生の一大事」という言葉を聞かせていただきました。これからもどうか、よろしくお願いいたします。

草々

なむあみだぶつ　合掌

三橋祥江　拝

千葉県にお住いの三橋さんはアメリカにおられる名倉さんのリモートを通してのご縁です。法蔵菩薩さまのおはたらきが味わえるまで聞法を続けてこられたお方ですから宿善の深い方だと思われます。いちど長仁寺にも参詣したいとのことです。これからの歩みが楽しみです。

次に、九月二十六日から二十八日にかけて新潟県からご参詣の明岸寺住職法隆光昭さんのお便りです。

謹啓　秋分の頃　皆様、ますますのご清栄のこととお喜び申し上げます。

　　先日は、二泊もお世話になりました。御法座の時間だけでなく、一日中ずっと、聞かせて頂きました。ありがとうございました。

　法座が終わると仏法のことは忘れます。常照先生は「だから勤行が大事なんや」と。私は勤行を軽く考えているなあと思います。

　　　今回、なるべく私のフィルターを通さず聞かせて頂きたいと思っていました。そうして一歩引いて見ると、言葉や表現を聞かせたいわけでなく、本願に触れさせたいんだなあと感じさせられました。

　　「生活の中で、如来様如来様と。如来様がどこにいるか探せ」という趣旨のことを、ｋさんにお話しでした。私も、その通りだなあと聞かせて頂きました。

　　何か知って得になったというのとは違う、ただ楽しい時間でありました。ありがとうございました。取り急ぎお礼まで。

　季節の変わり目ゆえ、どうぞ体調を崩されませんようご自愛くださいませ。

　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　合掌

かなめのところを受けて下さって有難いです。すたれていく寺院が多いなかで光明土へ向って明

るくなっていかれる皆さんに触れて本願力が湧いてくると申しますか、元気が出てきます。共に

浄土の中で浄土へ浄土への歩みであります。

令和六年（２０２４）十月四日

　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　常照　拝